

ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動の場としての「地域」の創出

著者	西川 麦子
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	156
ページ	145-176
発行年	2009-03-25
URL	http://doi.org/10.14990/00000943

ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動の場としての「地域」の創出

—情報のネットワークと個人の選択を基盤とした

レジデンツ・アソシエーション—

西川 麦子

はじめに

さまざまな人々が集まり移動し、住民の匿名性の高い都市空間において、人々がそこで暮らす場所に根ざした住民組織の運営、活動の動向、地域コミュニティづくりの可能性を、ロンドンにおける実地調査にもとづいて探ることが本研究の目的である。

調査研究の主な対象としているのは、インナー・ロンドンの西端にあるハマースミス&フラム自治区 (London Borough of Hammersmith and Fulham : 以下LBHFと記す) 内にある (旧) グローブ区 (Grove Ward)¹ である。かつてはロンドンの貧しい地区² の1つであった。1990年代以降はロンドンの都心部などに勤務する高所得者層が住宅を買い求め、不動産価格は高騰し、現在ではミドルクラスが住民のより多くを占めるようになった。過去20年のあいだに高級な住宅地へと変容したが、自治体や非営利住宅協会が所有する低家賃住宅も点

1 区 (Ward) とはロンドンの地方自治区 (Borough : バラ) 内の行政単位であり、バラ議会議員を選出する際の選挙区である。人口構成や政策の変化に応じて区画が見直される。2002年5月にLBHF内のWard数は23から16に改変され、グローブ区は隣接する2つの区に分割、合併された。これにより、グローブという名称も行政区画もなくなったが、本稿では、旧グローブ区をさして、グローブ、あるいは旧グローブ区と記す。

2 “London’s Deprived Areas-A Comprehensive Approach” (1973) では、1971年センサスによるとグローブ区は、インナー・ロンドンにおいては優先的に対策をたてる必要がある36貧困区の1つとなっている (西川2004, p.82)。

在し、異なる経済的階層の住民によって構成される地域である。

筆者は、2001年9月から1年間ハマースミスに滞在し、下宿近くのコミュニティ・センター（Grove Neighbourhood Centre : GNC）を住民として利用するなかで、都市の地域社会に関心をもち調査研究を始めた³。2003年から2008年にかけては、毎年8月にハマースミスに滞在し、GNCの活動に参加しながら、グローブや近隣地区の住民組織について関係者に話を伺い、さまざまな活動記録を閲覧、収集してきた⁴。

ロンドンでの調査において、インタビューや資料のなかでコミュニティという単語にふれることは多いが、現地との関わりをとおして見えてきたのは、隣近所の住民が互いを認識しているわけでも、特定の地区や集団への愛着や帰属意識を共有しているわけでもない地域の現状であった。暮らしのなかで「コミュニティなるもの」を实体として共有できない状況のなかで、誰にとっても馴染みがあり多様な意味を含む「コミュニティ」という言葉が、住民へ呼びかけ組織を運営していくうえで重要な単語となっている。コミュニティをキーワードに掲げて、都市の住民たちがどのような地域づくりを求め、人と人が関わり、住民組織の活動を展開しているのだろうか、と考えるようになった。2008年度からは、「都市空間にける住民組織・活動の『コミュニティ戦略』についての文化人類学的研究」（2008～2010年度科学研究補助金基盤研究C）を受けて調査を継続している。ここでは、組織形態、運営方針が異なるいくつかの住民組

3 甲南大学より在外研究の機会を得て、英領インドの浮浪者法の研究のためにロンドンに滞在し、大英図書館へ通い史料研究を行っていた。生活においては、GNCが主催するGood Neighbours Projectにボランティアとして登録し活動に携わり、その後、GNCの運営委員の一人となった。2004年からは、「都市空間における地域コミュニティ形成の可能性についての文化人類学的研究」（2004～2007年度科学研究補助金基盤研究C）を受けて調査研究をすすめた。

4 これまでの調査については、西川2004、2006、2007、2008a、2008bを参照。1973年にGNCが設立される経緯と現在の活動については西川（2004）、この論文の改訂版として、加筆修正して図表などの資料を加えた英語論文（西川2006）は、甲南大学社会調査工房オンラインに掲載している。2007年までの調査のまとめとして、今日のGNCの地域における位置づけや組織運営上の問題点については西川（2008a）に整理した。また、ロンドン調査においてコミュニケーション・ツールとしてビデオ・カメラを用いたフィールドワークの方法について西川（2008b）で論じ、ハマースミスでGNCが誕生する前史となる、ノッティング・ヒルでの1960年代のコミュニティ活動については西川（2007）にまとめた。

織の調査をとおして⁵、地域の現状と人々が求める地域コミュニティ像を多角的にとらえようとしている。

この論文で扱うのは、旧グローブ区内に1999年に発足したブラッケンベリー・レジデント・アソシエーション (Brackenburg Residents Association : BRA) という会員、会費制の住民組織である。住みよい環境づくりとコミュニティ精神 (Community Spirit) を育むことを目的としている。ニューズレターの発行やEメールによる通信をとおして、地域の多彩な情報を会員や地域住民に届け、近隣防犯、落書き消し、街路樹育成など、地域に密着した活動を行っている。毎年会員数を増やし、2008年7月現在では400名を超えた。その一方で、BRAを「ミドルクラスの利益を守るための活動だ」ととらえる住民もいる。地域においては、比較的新しく結成されたBRAは、その組織運営においてどのような特色があり、BRAの活動の何が、より多くの住民の関心を引き付け、また一部の住民にとっての違和感をもたらしているのだろうか。

本文1では、調査地域の概要を、2では、ロンドンでのフィールドワークの経緯、とくにどのようにしてBRAの調査が始まったのかを説明する。3では、BRAの設立、組織、運営について概説する。ここでは、BRAが組織名として、グローブという区の名称ではなく、ブラッケンベリーという場所の通称から選ばれたことに着目する。4では、BRAが住民にどのように働きかけて地域にたいする意識を生み出しつつあるのかを、諸プロジェクトの展開から具体的にたどる。5では、BRAの地域づくりの特色を、防犯に強いコミュニティづくりを提唱する「割れ窓理論」を参照にして分析する。そこでは、BRAの活動基盤と機動力が、集団や地域への帰属意識や共同性にあるのではなく、場所をめぐる

5 2008年現在は、ハマースミスにおける3つの住民組織についての事例研究をすすめている。1つは、これまで調査研究を行ってきたNPOのコミュニティセンター、グローブ・ネイバーフッド・センター (GNC) の活動についての継続的調査である。GNCは、慈善団体として登録された会社 (a company limited by guarantee) である。2つめは、本論文で扱うブラッケンベリー・レジデント・アソシエーション (BRA) である。3つめは、ハマースミスにあるマスプロ・センター (Masbro Centre) と呼ばれるNPOのコミュニティ・センターである。GNCと同様、1970年代に地域住民が結成したネイバーフッド・カウンシルを核に展開してきた。設立から30年以上をへて、GNCが従来とおりグローブに拠点をおいて存続をはかるのとは対照的に、マスプロ・センターは、対象地域の枠をはずしてより広域の住民を対象に、しかし各プロジェクトのターゲット層を明確にして戦略的、多角的な活動を展開している。

情報のネットワークと個人の選択と自主性にあり、一部の住民の活動の場としての「地域」が創出されているのではないかという側面を考察していく。

1 調査地の概要—「労働者の住宅地」のジェントリフィケーション

ハマースミス & フラム自治区⁶—二極化の進行

ハマースミス & フラム自治区 (LBHF) の人口は、2001年センサスでは、165,242人、世帯数75,438である。2004年推計では、人口は176,800人に増え、2001年から2004年にかけての人口増加率は4.4%である。イングランドとウェールズの自治体のなかでは、人口密度は4番目に高く、1ヘクタールあたり100.73人である。年齢層別人口構成においては、若年齢層成人（25～39歳）が37.6%と高い比率を占める⁷。2001年センサスでは、平均世帯員数は2.16人である。年金受給を受けていない単身世帯27.4%と2人世帯（子を含まない）13.4%を合わせた小規模世帯が4割を占める。被扶養者となる子を含む世帯の比率は17.91%（両親と子11.37%、一人親と子6.54%）と小さい（以上LBHF2006a, pp.9-17）。

住民の転出入の移動が激しく、5世帯のうち1世帯が2000年から2001年までの1年間に住所を移動し（LBHF2006a, p.10）、2004年推計では、LBHFの約半数の世帯は、過去5年以内に転入してきており、毎年、個人所有の賃貸住宅の居住者の3人に1人は移動する（LBHF 2006b, p.3）。

住宅に関しては、2001年センサスでは、持家率は44.0%、賃貸住宅は、公営19.2%、住宅協会13.5%、個人所有23.4%である（注11、表2参照）。2004年における平均不動産価格は、£377,406である⁸。また、賃貸住宅の家賃は、2003-

6 調査地の概要は、西川（2004, 2008a）を参照。ここでは、要点を短くまとめる。

7 表1 年齢層別人口構成（%）2004（LBHF2006a, p.11より作成）

年齢層	0-4	5-10	11-16	17-24	25-39	40-49	50-64	65-74	75+
LBHF	5.9	5.8	5.1	11.3	37.6	12.6	11.8	5.2	4.7
Inner London	6.7	6.6	6.2	11.9	34.0	13.1	11.7	5.2	4.5
England	5.7	7.3	7.8	10.2	21.3	14.1	17.6	8.3	7.6

Data Source :Mid-Year Estimates, ONS

2004年Housing Need Surveyでは、個人の賃貸住宅は、1ベッドルームの平均家賃が週£215、4ベッドルームは週£457である。これに対して、LBHF内の公営住宅の平均家賃は、2005年4月時点では、週£71.20、住宅協会が£73.27と、かなり低い（以上LBHF2006a, p.43）。

経済活動に携わる人口の割合は2001年センサスでは、男女とも全国平均よりやや高い（男性75.3%、女性64.3%）。16～74歳人口のうち専門職・管理職は44.2%であり、全国的にみると高い比率を示している（LBHF2005, p.11）。貧困層と富裕層の二極化が高所得者層の増大というかたちで進行し、Housing Need Survey 1998、2003のデータによると、世帯総年収が£10,000未満世帯は98年35%、2003年36%と大きな変化を示していないが、年収£50,000以上世帯は、98年13%から2003年には21%に増えている（同上p.44）。⁹

旧グローブ区—「労働者の住宅地」のジェントリフィケーション

グローブ区は、2002年5月のLBHF内の区画の改変によって、レイヴンズコート・パーク(Ravenscourt Park)とハマースミス・ブロードウェイ(Hammersmith Broadway)に二分された後は、名称も地図上の境界も存在しない¹⁰。ここでは、旧グローブ区をさして、グローブと記す。LBHF中心部にあり、行政、商業の中心地、交通の要点であるハマースミスと、北部の商業地であるシェファード

8 2003-2004年Housing Need Surveyによると、1998年から2003年の不動産の平均価格は、イングランド&ウェールズで100%、ロンドンで158%変動したが、LBHFでは、217%に高騰している（LBHF2006, p.43）。

9 2006年5月のバラ議会議員選挙では、保守党が過半数を占め、LBHFにおいて40年近く続いた労働党政権と交代し、地域におけるミドルクラスの増大を印象づけることになった。

10 2001年センサス・レポートも、新しいWard単位で資料が作成されたため旧グローブ区に関する統計資料はない。1991年センサスにおいては、グローブの人口は5870人、世帯数は2967、である。白人が85%、年齢層では、25歳から44歳の若年成人層が44%を占め、75歳以上の高齢者層の比率は6%にすぎない。世帯の77%が、構成員が1人（46%）か2人（31%）の世帯である。グローブに転入して1年にならない住民が18%となっている（LBHF 1993, pp.72-73）。ちなみに、2001年センサスでは、Ravenscourt Park は人口10,791人、世帯数4739、白人80.61%、Hammersmith Broadwayは、人口11,560人、世帯数5317、白人77.16%である。（Ward Profile-Ravenscourt Park, Hammersmith Broadway）。1970年代以降の行政区画の変遷については、社会調査工房オンライン、5-2-8「都市空間におけるコミュニティ・センター／ローカル・コミュニティの欠如？」内「地図にみるグローブ『区』の変遷」参照。

ブッシュ (Shepherds Bush) の間に位置する。ヴィクトリア時代の建築物が並ぶ閑静な住宅地であり、もともとは労働者用として建設された小規模住宅が多く、現在では単身者や少人数世帯には適度な大きさである。LBHFにある45の保存地区 (Conservation Area) の1つ (Brademore Area) として指定されている。

グローブ近辺には、バスターミナルが1つ、地下鉄の5つの路線 (Picadilly, District, Hammersmith and City, Central, Bakerloo) の駅があり、ロンドン中心部やヒースロー国際空港へ移動しやすい。ハマースミス駅周辺には、大手のスーパーマーケットが複数立ち並び、ショッピングモールもあり、日常の買い物にも便利である。公立の小学校も近年は高い成績をおさめ評判がよく、高額の授業料を払うことができるのであれば、複数の有名私立学校もある。都心への通勤、生活圏内での通学、送迎、日常の買い物等においては、好条件がそろっている。

1990年代以降は、高価格の住宅を購入しうる経済的階層の住民が転入し、かつて労働者向けのバブであったものが、食事もできる洒落たガストロバブとなり、新しいレストランが開店し、高級食材や健康志向の素材を扱う食品店、各種クリニックが開業していった。高所得者層は、世帯規模の変化や、不動産価格の変動をみながら適当な時期に住宅を売却し、郊外などへ転出し、居住者が入れ替わりやすい。1970年代以降、非営利住宅協会が購入した住宅は、現在でも低家賃で貸し出されている¹¹。

高所得者層の居住者が多くを占めるようになった地域の変化について、一部の住民は「ジェントリフィケーション (gentrification)」と表現する (西川2004、pp.86-89)。英語の字義通りには、高級化、中産階級化を意味し、1970年代以降の欧米の大都市で起きたミドルクラスが都市部へ回帰する現象をさして用いられるようになった¹²。ジェントリフィケーションは、日常会話のなかで住民どうしが頻繁に使用する言葉ではなく、新聞や雑誌記事、調査報告書などにおいて専門用語として用いられる。調査を通して出会った人々に私が、地域の変化、とくにジェントリフィケーションに関心があると説明すると、反応は大きく3つにわかれる¹³。①この英語の単語そのものに馴染みがない。②この単語を地域にあてはめて語ることに違和感がある。③この単語の意味とそれがどのよう

な現象であるかを具体的な事例から解説する。

③の「ジェントリフィケーション」を論説する人々とは、高等教育を受け、諸メディアの情報を注視し、不動産を所有し、あるいは高い家賃を支払ってグロブに居住する経済的余裕がある人々である。住民のあいだではいわゆるミドルクラスと分類され、つまりは、ジェントリフィケーションという現象を担う当事者たちである。ブラッケンベリー・レジデント・アソシエーションとは、こうした層の住民をより多く引きつける住民組織である。

- 11 LBHFはロンドンの他地域やイングランド全体と比べて非営利住宅協会が運営している住宅の割合が多い。非営利住宅協会としてイングランドにおいて先駆的な組織であるNotting Hill Housing Trust本日もLBHFにある。

表2 2001年センサス：住宅形態（持家、賃貸等住宅） 数字は%

	R.P.Ward	H.B.Ward	LBHF	London	England
持家	23.09	13.09	17.24	19.21	24.45
持家（住宅ローン）	28.04	19.15	23.99	38.22	46.13
持家（複数共有）	1.25	0.72	0.92	0.94	0.64
公営住宅（地方自治体）	11.69	19.43	19.28	16.65	12.38
住宅協会等住宅	11.02	23.02	13.44	8.80	5.55
個人賃貸住宅（個人、不動産業者）	21.53	21.00	21.05	13.36	8.01
個人賃貸住宅（従業員用、親族、友人、他）	1.19	1.15	1.55	1.07	1.16
家賃なし住宅	3.38	2.43	2.52	1.75	1.69

Data source : Census 2001, TableUV 43、Ward Profile Ravenscourt Park, & Hammersmith Broadwayより作成 R.P. : Ravenscourt Park、H.B. : Hammersmith Broadway

- 12 園部（2008, pp.77-80）では、「都市への回帰」と言われる現象をめぐる関連する3つの用語、「ジェントリフィケーション（紳士化）」「リバイタリゼーション（再活性化）」「リインベイジョン（再侵入）」についての議論を整理している。そこでは、B・ロンドン（1984, pp.4-26）による議論を次のように要約して紹介している。「『ジェントリフィケーション』という言葉で言い表されている現象は、これまでに衰退を経験してきたインナーエリアの近隣において、いま住んでいる低階層の居住者に、上中階層の居住者が取って替わる過程のことであり、それをジェントリフィケーションという言葉で表現することは、その言葉が本来持っている貴族社会化というイメージとは合致しないということになる。」（園部2008, p.78）。
- 13 西川2006、社会調査工房オンライン「5-2-10新しい模索／節目と時機をつくる—2005/06年」参照。一部の住民が、ジェントリフィケーションという表現を好まないのは、前注でふれたロンドン（1984）が指摘しているような、「貴族社会化」という言葉のニュアンスにたいする違和感や、上中階層の居住者が多くなる地域の変化にたいする旧住民が抱く居心地の悪さを示しているのかもしれない。

2 ブラッケンベリー・レジデンツ・アソシエーション (BRA) の調査へー「情報に開かれた人々」

筆者がブラッケンベリー・レジデンツ・アソシエーション (BRA) の関係者とコンタクトをとるようになったのは、2005年になってからである。前述したように、2001年からグローブ・ネイバーフッド・センター (GNC) の活動に関わりながら地域社会に関する調査を始めた。GNCは、都市貧困問題委員会というNPOが、ハマースミス・コミュニティ開発プロジェクトを立ち上げ、住民に働きかけて1973年に設立された。このプロジェクトは、都市の貧困区のなかでも、住民のあいだにコミュニティ意識が薄く、既存の住民組織が見いだせない一区画に住民選挙によるネイバーフッド・カウンシルを結成し、地域にたいする意識を育みながら住民自らが生活環境を改善していこうとする試みであった(西川2004)¹⁴。

調査のなかで地域やGNCの活動の変化について、ジェントリフィケーションが進行する以前からグローブに住む人々に話を伺うときに、私がBRAについて言及すると、「ミドルクラスは自分たちの不動産の価格のことしか念頭にない。」「ブラッケンベリー・ヴィレッジなんて不動産業者が考えついた名前だ。」という内容の批評を何度か耳にした。高価格の住宅を購入し、あるいは高い家賃を払うことができる階層の人々であるからといっても、それぞれは世帯構成も職歴も抱える事情も様ではない。また、BRAの会員が特定の階層の住民からのみ構成されているわけではない¹⁵。「ミドルクラスは・・・」というステレオタイプ化した語りや、現実をそのまま表わしているとは考えにくい。BRAの活動をよく知ったうえで、人々の批評が意味することについて考えたい。とは思

14 こうした目的に合致した地区としてグローブがプロジェクト対象に選ばれた。住民選挙が実施され、各ストリートの代表として20名の議員が選出され、地域の問題について話し合うグローブ・ネイバーフッド・カウンシルが結成された。その活動拠点としてコミュニティ・センターが開設され、行政や民間団体からの助成金をえて1994年には2階建ての現在の建物となった。GNCの35年にわたる活動は、貧困区での住宅問題にとりくみ、子育て支援、高齢者やさまざまな事情を抱えた個人が集う機会や住民グループが活動する場を提供してきた。

うのだが、新旧住民のあいだの、あるいは異なる経済的階層のあいだの距離感やバウンダリーのようなものを計りかねて、どのように調査を続けてよいのか慎重になっていた。

2005年8月、戸惑いながらもBRAの会員である知人を通して、BRAへ紹介してもらった。会員担当の運営委員Rからはすぐに、私宛てにEメールが届いた。Rへの返信に、自己紹介と、グローブにおける調査の経緯、ジェントリフィケーションという現象やBRAという組織への関心、調査を行いたい、資料があればいただきたい、といった旨を書いた。また、甲南大学社会調査工房オンラインに掲載している英文の調査報告書（西川2006）のアドレスも記した。私のメールを受けてRからは、親切な返信文と20を超える添付ファイルが送られてきた。BRAのニューズレターのバックナンバーや入会関連の資料などであった。

その直後からである。私宛てに、知らない人から次々とメールが届いた。BRAの会員からである。いずれも、差出人本人の簡潔な自己紹介（氏名、職業、年齢、住所、電話番号、既婚、未婚かなど）と、「あなたの紹介文、報告書を興味深く読んだ。調査に協力できることがあると思う。いつでも連絡ください」といった内容である。メールが7件、電話が1件。最初は、状況が理解できず困惑した。実は、私がRにあてたメールを、RがBRAのメールアドレス登録会員200名ほどに転送していたのである。BRAからメールを受け取った会員が直接に私へ連絡をしてくれたというわけだ。

会員たちのメールは、私の調査にたいして何を行いうるかを具体的に示していた。「ジェントリフィケーションについてなら、最近のパブに行ってみるとよく分かるよ。この辺でもっとも人気があるパブで待ち合わせて話しましょうか。」「私は、～歳の弁護士、～年に～に引っ越してきました。ただいま育児のために休職中。子供たちが賑やかですが、よかったら家を訪ねて来てください。ジェントリフィケーションについて、自分の体験をお話することができると思っています。」「近所の～さん、仲良くしているけれど、彼は古き時代からの住民、

15 実際のところ、GNCをワーキングクラス、BRAをミドルクラスのための住民組織と分けることはできない。地域のさまざまな階層の人々がGNCを利用し、そのなかにはBRAの会員もいる。BRAの年次総会は、毎年GNCのホールを借りて行われ、GNCが主催するイベントについてBRAの会員へもメールで情報が送られる。GNCとBRAとの関係に、何らかの障壁があるわけではない。

ぜひ、彼の話聞いてみるといいわ。奥さんもとっても気さくで愉快な人よ。」

その後、何度かメールのやりとりをして、30歳代から60歳代までの、女性6名と男性1名と直接に会うことができた。ある人は、このあたりで一番コーヒーがおいしいと評判のカフェで会い、街を散策しながら歴史的な建造物の説明をしてくれた。ある人は、雰囲気異なる2つのパブを移動して飲食をしながら話した。自宅を訪ねると、台所で、居間で、あるいは夏の夕方の静かな庭に通された。初対面の私にたいして、どの人も、1時間から1時間半、各自の暮らしについて、地域について、ジェントリフィケーションについて、途切れなく、快活に話を続けた。ここに引越してくるまでの人生を話しながら、自宅の隅々を見せてくれる人もいた。

BRAの会員たちとの出会いは、それまでの4年間、GNCをとおして知り合った人々との関わり方とは異なるものだった。GNCでは、人と人との顔が見える関係が基本であった。コミュニティ・センターという場所で顔見知りとなり、あるいはGNCのスタッフから一人一人を紹介してもらった。初対面であっても、仲介者をとおして事前にその人についてある程度の情報をえていた。ところが、BRAの会員たちとの連絡は、Eメールを媒体として始まった。BRAの運営委員、会員、調査者（私）とのあいだでは迅速に情報が行き交い、顔が見えない複数の相手と、それぞれに話がすすんだ。

住民自らの調査協力への申し出を受けたことも、想像していない出来事だった。それまでも地域の多くの人々からの協力をえてきたが、時には調査という行為を敬遠されていると感じることもあった。インタビューにおいても、生年、職歴、学歴、家族など、個人的な情報についてどこまで尋ねてよいか躊躇した。ところが、BRAの会員たちは、自分が何者であるかを自ら表明し、自分の生活圏に調査者を招き入れ、自分を含めた地域を語る。一人一人は世帯構成も職業も、ブラッケンベリー・エリアに転入するに至る経緯も一様ではないが、「情報にたいして開かれた人々」という印象を受けた。

翌年2006年には、BRAの発足に関わった関係者たちに会うことができた。この年から、私自身がBRAの会員となり、以後、日本においてもBRAからの情報をメールで随時に受け取った。これにより、調査地域の日々の暮らしや他の住民組織、行政、警察関連などの、さまざまなニュースを得ることになった。2007

年、2008年には、BRAの運営委員に話を伺いイベントにも参加する機会をえた。以下では、これらの取材と2年半のあいだにBRAから配信されたメール、BRAのホームページや、そこに掲載されている2001年からの2008年までのニューズレター（以下ではNLと記す）、年次総会議事録（以下ではAGMMと記す）などをもとにBRAの活動とその特色をまとめる。

3 「ブラッケンベリー・ヴィレッジ」の新しい住民組織—実体のない名前

「ブラッケンベリー・ヴィレッジ」の住民組織の結成

1999年、グローブ内にある1軒のナイトクラブの営業にたいして地域の住民のあいだから、風紀が乱れる、黒い建物外装が周囲の景観にそぐわない、という抗議の声があがった。この時、議論に加わった人々のなかから、レジデント・アソシエーションを結成しようという声があがった。設立当時のブラッケンベリー・レジデント・アソシエーションの記録には次のように記されている。「まず、地域の問題に取り組んできた住民有志から、隣のBrook GreenやRavenscourtにすでにあるような、住民とコミュニティの利益を高める住民組織が必要ではないか、という意見がだされた。有志が集まってそのような住民組織を結成しようと決心し、両レジデント・アソシエーションと会合をもち、設立に向けてのアドバイスを受けた。こうした準備に関わった6名が、実質的な設立委員となった。コミュニティにとっての利益を優先課題とし、非政治的、非官僚的であるべきだという方針をたてて準備をすすめた」(BRA : AGMM1999)。

最初の集会は、1999年7月1日午後8時、グローブ・ネイバーフッド・センターで開かれ、新しい住民組織が結成された。設立委員会は、集会の参加を呼びかけるビラを印刷し、地域の3600世帯に配布した。当日は、100名以上が集まった¹⁶。集会では、設立委員会のメンバーの一人が議長代理として、新しいアソシエーションの設立趣旨を次のように紹介した (BRA : AGMM1999)。

・ 地域のアメニティ、設備、サービスの改善を求める

- ・ 地域の特質を保護し高めることを助ける
- ・ より素晴らしいコミュニティ精神（greater sense of community）を育む
- ・ 地域の問題についての意見交換を行う場を提供する

続いて組織の名称について話し合われた。原案のBrackenburg Residents Associationにたいして、「フロアからは、『Grove Residents Associationとすべきではないか。グローブは長年使用され区の名称として浸透しているが、ブラッケンベリーには実体がない』という意見や『どちらかというブラッケンベリーのほうがよく知られており、親しみやすい響きだ』という意見もあった。挙手による多数決によってブラッケンベリーが採択された。」(BRA: AGMM1999)

ここでのブラッケンベリーという名称は、Brackenburg Villageに由来している。これは、1990年代以降、当該地区の物件を扱う不動産業者のあいだで使い始めた呼び方である。グローブの中央、Brackenburg RoadとAldensley Roadの交差点に、精肉店、食料品店、雑貨屋、カフェ、レストランなどの小さな店舗（いわゆるコーナージュブ）や、当時は郵便局の小さな支局があった。「ブラッケンベリー・ヴィレッジ」とは、ここを核として、生活に必要な機能をコンパクトにそなえ人々が行き交う都市のなかの古き良きヴィレッジ、という地域イメージを売り出すために不動産業者がとった戦略の結果生まれた名称である。グローブに長く住む人々にとっては、業者が後からつけた地域の通称とは馴染みが薄い。逆に不動産業者をとおしてこの地の住宅を購入した人々にとっては、ブラッケンベリー・ヴィレッジという名前には愛着をもちやすい。

BRAの会則では、対象地域は、Brackenburg areaと記され、その境界を南は

16 第1回集會に参加し、後に運営委員の一人となったRが、2005年8月のインタビューのなかで次のような内容の話をしてくれた。「その数日前にノースケンジントンからハマースミスに引っ越してきたばかりだった。戸口のレターボックスに届けられた集會の案内をみて、会場となるGNCもすぐ近所だし、集會へ出かけていくことにした。ノースケンジントンでも、1970年代半ばからレジデント・アソシエーション活動に関わってきた。そのため、転入してきた場所に、こうした住民組織が発足することに興味をもった。GNC 1階ホールには、座れないほど大勢の人が集まり、集會は熱気を帯びていた。驚いたことにそのなかに見知った顔があった。以前住んでいた地域の住民だった。」

Glethorne Road、西はPaddenswick RoadとDalling Road、北はGoldhwak Road、そして東はHammersmith & City Line、と明示されている。当時のグローブ区の範囲と重なるにもかかわらず、グローブではなく、ブラッケンベリー・ヴィレッジのレジデント・アソシエーションと銘打ったことは、このレジデント・アソシエーションが従来の地域とは一線を画した住民組織であるという印象を残した。しかし、ブラッケンベリーという名称を採用したことによって、結果的には、その後の区画変更の影響を受けず、また、近年転入してきた住民にも親しみやすい組織名となった。現在のBRAのホームページのトップページには、ブラッケンベリー・ヴィレッジとは、不動産業者たちがつけた名称であり実際に存在するわけではないと記したうえで、用いている。

またレジデント・アソシエーション設立に向けての準備プロセスについての説明にもあったように、レジデント・アソシエーションは、近隣地域においても既にいくつも設立されていた。BRAの会員のなかにはグローブに転入する以前に、こうした住民組織について知っていたり、活動に携わっていた人もおり、新住民にとっても、レジデント・アソシエーションには関わりやすかった。設立委員たちが一戸ずつに配布したビラにたいして「140名を超える申し込みがあり、その数は集会後にはさらに増えて約200名となった。」(BRA: AGMM1999)

組織運営

BRAの会則は、1999年以降、幾度か改正されてきたが、住民にとって住みよい街づくりをすすめるという目的には変わりはない。2008年12月現在、BRAのホームページの入会案内には、BRAは次のような事項に関心をもつと記されている。「**計画許可**」(地域の開発計画の申請だけでなく、とくに保全地区では住宅の正面、衛星アンテナ、木々の管理などにも注視する)。「**ゴミ**」(ゴミ収集に関しては行政とも協力して近隣住民にも働きかけ、通りの美化をすすめる)。「**交通・駐車**」(歩行者、自転車、自動車の運転者にとっての安全や、とくに住宅地のスピード、駐車制限などの問題に取り組む)。「**犯罪**」(ネイバーフッド・ワッチ [Neighbourhood Watch] をすすめ、警察と連携して防犯に取り組む)。「**集会**」(年次総会の他にも、住民が集まり話をする機会を設けより良い近隣関

係を築く)。

運営委員会は6名から14名で構成され、年次総会で選出、承認される。任期は1年であるが再選を妨げない。役員は、議長、セクレタリー、会計であり、運営委員のあいだで決められる。2008年9月現在で運営委員12名が、[議長]、[セクレタリー]、[会計]、[会員関係セクレタリー]、[ニューズレター編集]、[懇親会]、[ネイバーフッド・ワッチ・コーディネーター]、[樹木オフィサー]、[グラフィティ&ネイバーフッド・ワッチ代表者関連]、[企画]、[法&会則]、といった11の役割を担当している。上述したような問題に関して、運営委員会が数カ月毎に開かれ、こうした問題を話し合い、住民の声を行政、警察、企業に届ける。運営委員の他に、当該地区内の37の道路のそれぞれの代表者を募集しBRAと会員や住民のあいだをつなぐストリート代表には、2009年1月現在13通りから14名が参加している (BRA:HP)。

BRAへの加入は、申込書に、氏名、住所、連絡方法、関心事、などを記入し、会費支払いの手続きを行う。年会費は£3、65歳以上割引£1、企業、学校、レストラン等£10、である。寄付も受け付ける。毎年6月から7月に開催される年次総会から1カ月ほどの期間に会費を払わなければ、新しい年度のメンバーシップを失う。他所へ引っ越した後も、会費を払いメンバーシップを維持することもあるが、会員は、基本的にはブラッケンベリー・エリア内の住民である。2008年7月現在では会員数¹⁷は405名となった。会員の性別、職業、世帯別などの資料はないが、ブラッケンベリー・エリアの住民の10%ほどが、BRAの会員となっていると推定される (BRA:NL, January2006)。メールアドレス登録者は、2003年には会員全体の50%ほどであったが、2008年には80%近くまでに増えた。2005年にはBRAのホームページが、2008年には会員たちが書き込むブログも開設された。

BRAに関わるとどのようなメリットがあるのか。BRAのパンフレットにはこう述べられている。「会員となれば、地域を良くするあなたのアイデアを伝

17 BRAのホームページに添付されている総会議事録に記載されている会員数は次のとおりである。2001年度掲載なし、2002年度会員数210 (うち新規59)、2003年度227名 (新規37名、メールアドレス登録116名)、2004年度記載なし、2005年度323名 (新規48名)、2006年度244名 (新規30名、メールアドレス登録222名)、2007年度395名、2008年度405名 (メールアドレス登録80%近く)。

え、決定者に影響を与える機会を増すことができます。」「アソシエーションとして、私たちは、あなたの懸念や提案を受け止め、議会や議員と定期的に交渉して、政策と実践へ影響力を強めていきます。」「アソシエーションをサポートすることによって、あなたが住んでいる場所を守り改善を推進していくことになります。」「アソシエーションからニュースレターを受け取り、地域で起きつつあること、さまざまな活動、あるいは行政の計画についての最新のニュースを知ることができます。会員からのニュースや意見も奮ってお知らせください。」「コミュニティのために活動したいという人は、運営委員会にお知らせください。時間と関心があればアソシエーションの仕事をお手伝いいただければ、大歓迎です。」

BRAの会員となったからといって、特別な義務はない。BRAをどのように利用するかは、あくまでも個々人の選択である。自分たちの暮らしと地域に関わる問題を、そこに住む当事者として自発的に考えて行動することが、BRAの活動への参加の基本となっている。運営委員となり雑務を自ら引き受け諸活動を担うのも、ストリート代表となるのも、その人の意思と行動による。年次総会への参加も会員の自由である。BRAの運営委員会が、地域のある開発計画に反対を表明したとしてもそれに同調する必要はないし、BRAの運営委員会からの提案にたいして別の意見を述べることも、問題に関わらないこともできる。BRAが企画するクリスマスのイベントや講演会、地域を歩いて歴史を学ぶツアーに参加したいと思えば、各自が申し込むか、指定された日時に集合場所へ行けばよい。

会員たちのなかに、法律、金融、マスメディア、映像、建築、園芸、不動産、行政、医療などのさまざまな分野の関係者、経験者、愛好家が存在する。異なる立場からの情報や意見を出し合い、知識や経験、技能を提供し、対策や実践的方法を練ることができる。住民の関心と専門性を引き出すことを可能にしているのが、BRAと会員や、行政や警察、企業、他の住民組織とのあいだの情報網である。

情報のネットワーク

BRAが発信する情報は、年4回のニュースレター、週に1、2通のEメール

配信情報である。ニューズレターには、BRAの運営委員会での議論や各委員の活動報告、会員から寄せられた情報や意見などにもとづく。紙面は、例えば2008年のニューズレターは、A4用紙表裏2枚4頁、罫線、見出しに緑を使い、構図と色を考えたカラー写真を入れ、多岐にわたる内容を簡潔にまとめ、美しく、見やすく、分かりやすい。BRAが作成するイベントや開発計画にたいする反対運動のポスターなども、要点がわかりやすくインパクトもある。ニューズレターは、年に1回は、ブラッケンベリー・エリアの全世帯に配布される。不動産会社が印刷、配布等を支援している。

記事の内容は、地域に関わる開発計画（たとえば、LBHF住民に関わるヒースロー空港の発着便の航路拡大案や、大手スーパーの進出、巨大な駐車場建設、ブラッケンベリー・エリア内の店舗、営業などの計画申請をめぐる諸問題）、BRAの地区内での歴史的建造物や文化財保護（ヘンリー・ムーア [イギリスの彫刻家、1898-1986] が使用していたスタディオの保存、19世紀に建築され教会の修築など）、BRAの活動報告（地区内の落書き消し、街路樹植林、ネイバーフッド・ワッチ、BRA主催の集会、イベントの案内、ゲストスピーカーの講演内容）、生活情報（ネズミ、蛾の発生への対策、防犯グッズの紹介など）、他の組織との連携（地域担当の警察官の紹介、他のレジデント・アソシエーション、住民組織との会合など）、生活に役立つWeb Siteの紹介など、である。

ニューズレターが、会員以外の外部にも届けられる広報活動であるとしたら、BRAから会員へ随時に発信されるメールは、日々の暮らしのなかの進行形のニュースである。他の組織や団体からBRAの運営委員に送られてきた情報が、テキストや添付ファイルで会員へそのまま転送される場合もある。行政の開発計画の動向や公聴会、住民集会の案内や、各区の警察の近隣地区安全チーム（Neighbourhood Safer Team）の月刊ニューズレター、他の住民組織、あるいは店舗、劇場からのイベント案内や、会員からも、家の修築、維持に関わる職人や部屋の賃貸についての問い合わせや、電化製品や機材、家具などの売上の希望などが寄せられる。地域で生じた事件（盗難、殺傷、薬物売買など）についても情報が配信され、防犯などへの注意を促すこともある。数百人の住民のあいだで地域に関する日々の情報が共有、蓄積、更新されることは、地域づくりの素地となっている。

BRAからのEメールによる情報は、日本であろうとハマースミスであろうと場所と無関係に届く。大阪の賃貸マンションに住む筆者にとって、自分が住む地域の情報よりも、BRAからの暮らしのニュースの方が多く、ブラッケンベリー・エリアを身近な地域に感じる。だが、もちろん、ブラッケンベリー・エリアは、インターネット上のコミュニティとは異なる。物理的な空間として実在し、その場所に住む人々が、より良い地域づくりをめざして、そこで実際に活動を展開し、関係者のあいだに住民意識や地域への愛着、あるいは外部との境界を生み出しつつある。BRAの活動は多岐にわたるが、地域の創造という側面に着目して、4では具体的な活動事例を紹介していく。

4 BRAの諸プロジェクトと「ブラッケンベリー・エリア」の創出

地域の歴史的景観と治安を守り美化を推進する、これはブラッケンベリー・レジデント・アソシエーションの活動の1つの柱である。地域の歴史を学ぶさまざまな催し、LBHFの文書・郷土史センターの見学、講演会、Village Walk（専門的案内人とともに地域を歩いて歴史を学ぶ）などを、毎年、実施してきた。これらは、BRAの会員たちが地域についての学習をとおして改めてブラッケンベリー・エリアを認識、再発見していくプロセスともいえる。また、エリア内外での開発申請にたいしては、住民の暮らしにいかなる影響を及ぼす可能性があるか事前に厳しくチェックし、必要があれば他の住民組織とも連携して、地方自治体に異議を申し立て説明会の開催を要求してきた。

歴史についての学習や行政にたいする圧力団体としての活動だけでなく、BRAは、諸プロジェクトを立案、推進して、住民に働きかけて住民自らが「地域づくり」に関わる実践的な活動に取り組んできた。ここでは、3つのプロジェクトを紹介する。1つは、ストリートを単位とした住民の防犯活動である「ネイバーフッド・ワッチ」、2つめは、ブラッケンベリー・エリアからの「落書き一掃プロジェクト」、3つめは、住民の協力をえてエリア内の木々を育て増やしていく「街路樹プロジェクト」である。

「ネイバーフッド・ワッチ」—防犯活動と近隣意識

「ネイバーフッド・ワッチ」は、BRAが設立した当初からすすめてきた活動である。1999年7月の第1回総会には、グローブ区担当の地域警察官（Police Community：PC）も出席し、レジデンツ・アソシエーションをとおしてネイバーフッド・ワッチを推進していくことは、犯罪防止に大いに効果があるとして、こう述べている。「地域のストリートの代表をたて、近隣の住宅にも注意を払うことが重要である。不審なことが起きていないか、住民と警察が情報を交換する双方向的な関係である。警察には、コミュニティ相談グループがあり、毎月ハーマスミスのタウンホールでミーティングを開いている。」（BRA：AGMM1999）

ブラッケンベリー・エリアには、上述したとおり37のストリートがあり、その3分の1にはストリート代表者がいる。通りの住民の意見や情報をメールや集会をとおしてBRAに持ち寄り、またBRAからの配布物やお知らせがあれば、その通りの会員やその他の住民に知らせる。このあたりはロンドンにあっては、犯罪が多い地域ではないが、それでも、住宅への侵入や自動車の窓ガラスを壊しての窃盗、ひったくり、殺傷事件、物乞い、押し売り、不法な薬物取引といった問題は、存在している。各ストリートの問題として犯罪が話題となることは多いが、ストリート代表は、BRAの情報伝達の1つの仕組みであり、それがそのままネイバーフッド・ワッチとして機能するわけではない。

ネイバーフッド・ワッチとは、通りの代表者がいるだけでなく、近隣住民の全体的な取り組みである。近所の人々が互いの暮らしや住宅に注意を払い、住民の目が行き届いていることによって、犯罪が生じにくい環境をつくる。近隣で起きた不審な出来事や問題に気づけば住民は警察と連絡をとり、事件の速やかな解決をはかる。住民グループの防犯意識と地域を基盤とした警察の組織的な活動が連結することによって効果を発揮する。警察による地域を基盤とした防犯と取締の仕組が本格的に展開されるのは、当該地域では、「防犯近隣チーム」（Safer Neighbourhood Team：SNT）¹⁸が配備される2005年からである。

1で述べたとおり、LBHFでは、2002年に自治体内のWardが改変され、旧グローブ区が二分され、地域警察の所轄もハーマスミス・ブロードウェイ区とレイヴンズコート・パーク区に分割された。各区内の特徴は異なり、治安活動の

重点や人員配置の方針も一様ではない。2003年6月12日には、グローブ・ネイバーフッド・センターで、BRA、GNC、地域のネイバーフッド・ワッチのグループと2つの区の警察が参加して、ネイバーフッド・ワッチに関する公開集会被が開かれた。警察からは、ビデオ等を用いて地域の犯罪の傾向についての報告がなされ、住民とのあいだで質疑応答が行われた（BRA：NL, Summer2003）。

BRAは、2004年の年次総会（6月24日）では、メトロポリタン警察の警部（Inspector）を招き、コミュニティ・ポリシング（Community Policing:地域指向型警察活動）の新しい仕組み、チーム体制について説明を聞いた（BRA：AGMM2004）。翌年2005年の年次総会（6月21日）では、ハマースミス・ブロードウェイ区の巡査部長（Sergeant）から、この地区で本格的に始まった「近隣防犯チーム」（SNT）についての次のような説明が行われた。チームには、現在の2名の地域警察官（PC）に加えて、6ヶ月以内に新たに2名の地域警察官が参加する。さらに、何人かの地域住民警察担当官（Police Community Support Officer：PCSO）が加わり、担当地域を定期的にパトロールすることになる。PCSOの任務は、落書き、薬物密売、暴漢などのコミュニティの問題である（BRA：AGMM2005）¹⁹。

地域指向型の警察組織体制が整備されるのに呼応して、BRAではネイバーフッド・ワッチの普及をすすめていく。2005年には、開設したばかりのBRAのホームページにはSNTの構成と、緊急の度合と目的に応じた警察への連絡方法を記載し、さらにBRAの会員がユーザーネームとパスワードを入力すれば、警察のウェブ・サイトにログオンし犯罪等に関する情報を送信できるようになった。

2006年5月11日には、GNCで、ネイバーフッド・ワッチの活動を普及するための集会被が開催された。2つの区の巡査部長と両区のバラ議会議員と約30人の

18 日本語訳は、Metropolitan Police Authority (MPA, ロンドン警視庁) の日本語訳のパンフレットを参照にした。ここではSafer Neighbourhood Teamは近隣防犯チーム、Police Community Support Officerは地域住民警察支援担当官と訳されている。MAP：HP参照

19 2008年5月現在のHammersmith Broadway Safer Neighbourhood Teamは、PS (Police Sergeant) 1名、PC (Police Community) 3名、PCSO (Police Community Support Officer) 7名からなる (Hammersmith Broadway SNT Newsletter, May 2008)。

住民が参加した。巡査部長は話の最後に、ネイバーフッド・ワッチとは警察が推し進めるものではなく、主体はあくまでも住民であると強調した。BRAは、警察と連携してこうした企画を実施し、また全国ネイバーフッド・ワッチ協会や内務省のホームページから参考となる情報をダウンロードして印刷し、関心をもつ住民に資料を配布するなど普及活動をすすめた（BRA：NL, July2006）。

ネイバーフッド・ワッチの取り組みは、ブラッケンベリー・エリアにおいてのみではない。2007年には、LBHFレベルやその中の区単位でのネイバーフッド・ワッチ集会が開催され、BRAからはネイバーフッド・ワッチ担当の運営委員が参加している（BRA：NL, June2007）。2008年4月からは、ハマースミス・ブロードウェイ区の地域防犯チーム（SNT）が毎月ニューズレターを発行しており、BRAへ届くものが会員へ添付ファイルで転送されている。そこには、地域の詳しい犯罪発生件数や、物乞い、薬物取引、住居侵入、窃盗、自転車や自動車の盗み、引ったくり、などの傾向や、ネイバーフッド・ワッチや防犯事情が掲載されている。

地域指向型警察の取り組みとBRAからの住民への働きかけが連動して、ブラッケンベリー・エリアでは、ネイバーフッド・ワッチが普及していく。2008年10月配信のBRAニューズレター（Autum2008）には、ブラッケンベリー・エリアでは、10のネイバーフッド・ワッチが組織され、間もなくさらに2つが開始予定であると報告されている。BRAから会員へは、警察からのニューズレターを転送するだけでなく、ブラッケンベリー・エリアで発生した事件や住民、警察の対応についてもその都度、報告される。たとえば2008年8月のある日のBRAから会員へのメールでは、他のいくつかのお知らせとともに、最近起きた事件について次のような内容のニュースが配信された。

「ハマースミス・ブロードウェイSNTの巡査部長から、昨日、良いニュースが届きました。ネイバーフッド・ワッチとも関連することです。2日前に、一人の男が××通りの住居に押し入ったのを近隣住民が目撃し警察へ通報し、おかげで屋内で不審者を取り抑えることができました。この男は、住居不法侵入によって拘置され審判待ちです」。このメールには、××通りの住民への警察からの感謝状が添付されている。続いて同じメールにもう1件、「こちらは良くないお知らせです。先週、〇〇通りで、玄関の鍵を閉め忘れ、玄関にあった車の

キーとともに、車が盗まれてしまいました。玄関にはくれぐれも二重の鍵を締めておくように心掛けましょう」。さらに、「レイヴンズコートSNT巡査部長からは、こんな注意が届いています。最近、家々を訪ねてお金を無心したり、販売人などになりすまし、家人から電話番号を聞き出し、これにより不在を確認して住居に侵入するなど、詐欺の手口が増えていきます。また、今年の夏の初め頃には、見なりのよい若い女性が、家庭問題や生活の困窮や様々な事情を物語り通行人にお金を求める姿がよく見られました。通りであれ自宅戸口であれ、決してお金を与えないことです。」

警察や行政からの情報だけでなく、BRAから会員へ随時に届けられるエリアの生活情報が組み合わさって、住民にとってはより身近なニュースとなる。治安や犯罪に関する情報が増えるにつれて、不安も増し、自身の暮らしだけでなく隣近所や地域に注意を向けるようになる。近所の住民が互いの存在を以前よりは意識し、長期に不在をするときには、近所の人たちに予定を伝え、留守のあいだの不審な物音に注意してもらうなど、近所付き合いも生まれる。現在、ネイバーフッド・ワッチの運動に参加を表明しているのは、一部のストリートの住民であるが、防犯というテーマが広い層の住民の関心をよび、それがストリートや隣近所の住民を認識するひとつのきっかけとなっている。

「落書き一掃プロジェクト」—地域のバリア

「グラフィティ・プロジェクト」は、ブラッケンベリー・エリアからグラフィティ²⁰を一掃し、新たな落書きをさせないという成果によって、住民の活動と領域の存在を目に見えるかたちで示した。BRAがグラフィティ・プロジェクトを始める以前は、住宅の外壁などに多くの落書きがなされていた。グラフィティは、図像のなかには必ずタグがつけられている。これは、グラフィティの作成者を示すサインである。「このタグには、クラックコカインといった麻薬取引に関わるメッセージが含まれていると警察から話を聞き、BRAでは落書きを放

20 グラフィティ (graffiti) は、文字のフォームや図柄のモチーフや全体のレイアウトにパターンや暗黙のルールがある。この論文では、こうした一定の様式をもつ図像をグラフィティと呼び、落書きは、不法に他者の所有物に、あるいは適当ではない場所に何かを描き遺すことを広くさす。

置することは問題であると考えた」(BRA:HP)。グラフィティ問題担当となったBRAの運営委員が中心となって、2004年3月からプロジェクトを立ち上げ、グラフィティ撲滅デー (graffiti blitz day) を設け、ボランティアを募り、住宅の所有者や住民からの承諾を得て、地域の落書きに次々とペンキを上塗りしていった。2005年1月のBRAニューズレターには、「グラフィティ監視 (Graffiti Vigil)」という見出しで住民にグラフィティ一掃運動への参加を呼びかけている。次のような内容である。

「London School of Economicsの講師、Steve Gibbonsの報告書にも述べられているように、グラフィティとは住居侵害であるだけでなく、住宅価格にダメージを与えるものである。自治体はグラフィティの映像データベースを作成しており個々のタグを判別することができる。落書きやゴミの不法放棄には£2500の罰金が課せられるようになった。行政はホースからの高圧の噴射によってグラフィティを洗い流すサービスを実施しているが、これは壁に多少のダメージを与えることもあるので、住宅の所有者の承諾を要する。LBHFは£150万の予算を投入して落書き問題に取り組んでいるが、行政と住民が連携しないと地域からグラフィティはなくなる。BRAのグラフィティ除去のコミュニティ・プロジェクトにたいしては、自治体とHSBC（銀行）からそれぞれ£250の助成金を受けている。」(BRA:NL, January 2005)

2006年の取材のなかでBRAのグラフィティ問題担当者に、多数の写真を見せてもらった。地域内で発見された全てのグラフィティは、写真に撮影されタグから同一人物によるものを同定できる。新しいタグは、すぐに認識される。しかし、プロジェクトは、落書きの現場を押さえることが目的ではない。グラフィティの作成者には直接には接触せずに、しかし、挑戦的に新たな落書き行為が重ねられるたびに、直ちに消すことによって、この地域では落書きという行為を認めないという意味を強く示してきた。こうして2006年にはブラッケンベリー・エリア内では、グラフィティはほとんど見られなくなった²¹。目に見え

21 こうした落書き撲滅の取り組みは、他の地域からも注目されている。2007年度BRAの年次総会では、ブラッケンベリー・エリアに隣接するCambridge Grove and Leamore Streetで新たにレジデント・アソシエーションが設立され、そこでの落書き対策にBRAの担当者が協力していくと述べている (BRA:AGMM2007)

ないバリアを張り巡らし落書きという行為を阻止し、グラフィティがない街という成果によって、ブラッケンベリー・エリアと住民組織の存在を顕在化させた。

「街路樹プロジェクト」一地域を育む

2007年からは「街路樹プロジェクト」(Tree Project)が始まった。これは、ブラッケンベリー・エリアに街路樹を育て増やす、地方自治体と連携した取り組みである。プロジェクトに先立ち、2006年1月のニューズレターの第1面には、「ブラッケンベリーに緑を」(Brackenburg Goes Green)と題して、ロンドンの緑化と健康に関する調査と隣接地域の住民組織による緑化運動の取り組みを紹介し、LBHFの植林活動についてや担当者からのコメントを掲載している。行政は、住民が数本の街路樹を担当してその育成を見守る街路樹管理人を募集しており、ブラッケンベリーにおいても街路樹の育成や植林に関心がある人は参加しようと呼びかけている。(BRA : NL, January 2006)

翌年2007年4月21日には、BRAが主催してTree Walkと称し、自治体の担当者とともにブラッケンベリー・エリアの街路樹を見て歩くイベントを開催した。BRAのニューズレター (June2007) には、この日の報告が掲載されている。次のような内容である。

「2007年4月21日午前10時、Bカフェ前に16名が集まった。地方自治体の街路樹担当者とともに、2時間あまりをかけて、ブラッケンベリー・エリア内の街路樹の種類、枯れた木の処理や、新たに植えた樹木の場所や育成などについての説明を受けた。そして地域の人々が街路樹の育成にどのように協力できるかを自治体の担当者とともに検討した。ブラッケンベリー・エリア内には530本以上の街路樹²²があり、枯れるなどして伐採された樹木の代わりに16本が最近、植えられた。街路樹1本の植林費用は£175、最初の春と夏には週に2回、5リットルずつの注水が必要となる。その経費が1本あたり£45である。その後は、

22 ブラッケンベリー・エリア内にある街路樹は、サクラ160本、プラタナス105本、ナナカマド130本、ライム38本、モミジバフー36本、クマシデ科26本、ナシ25本、クラブアップル20本、ハンノキ15本、カエデ5本、アメリカキササゲ1本、となっている。(BRA : NL, June2007)

3年から5年毎に剪定される。植林のための地方自治体の予算はかなり少ない。

上記のような説明を受けて自治体の担当者と協議し、次のような交渉が成立した。住民が、行政に代わって若い樹木の注水作業を担当し、その経費を新たな街路樹の植林にあてるという契約である。住民が4本分の水やりをすれば£180 (£45×4)の公費節約となり、これで街路樹1本の植林費用 (£175)を捻出することができる。さっそく住民による街路樹育成の取り組みが始まり、BRAの会員が10本の街路樹の注水作業をすでに行っている。また、会員のなかからは£175を提供しスポンサーとなって街路樹を増やす計画に参加したいという声もでている。」

街路樹プロジェクトは1年で根付き、BRAニューズレター (Summer 2008) には、次のような内容の報告がなされている。「2007年のブラッケンベリー街路樹プロジェクトは素晴らしい成果をあげ、この数か月 (2008年) のあいだに29本の街路樹がブラッケンベリー・エリアに植林された。13本は、地方自治体が伐採した樹木の代わりに新たな木を植えた。残り16本はBRAの活動によるものである。会員が10本の注水作業を担当し2.5本分の植林費用を捻出した。BRAからは、3.5本分の植林費用を寄付し、さらに10本分は、BRAの会員住民や企業が寄付し木のスポンサーとなった。この新しい街路樹29本のうち25本の育成をBRAの会員がすでに担当しているので、来年には新たに6本の街路樹を迎えることになる。」

街路樹プロジェクトでは、住民が協力してエリアの樹木を育て地域の街路樹を増やし、街並み緑化に貢献している。街路樹は、プロジェクトの成果とBRAの関係者や参加者の交流と地域とのつながりを目に見えるかたちで象徴し、ブラッケンベリー・エリアにたいする愛着やそこに関わる住民としての意識を育てている。

5 住民の活動の場としての地域—情報のネットワークと個人の選択

「割れ窓理論」の実践—縄張り意識と当事者意識

ブラッケンベリー・レジデント・アソシエーションが展開してきた活動は、それを当初から企図していたわけではないが、「割れ窓理論 (Broken Windows Theory)」が重視する「縄張り意識」と「当事者意識」を育み犯罪に強い地域を志向しつつある。「割れ窓理論」は、G・ケリングとJ・ウィルソン²³が1982年に雑誌『アトランティック・マンスリー』に発表し、1980年代以降、欧米で台頭した「犯罪機会論」にもとづく犯罪対策に大きな影響を与えた。犯罪機会論とは、「犯罪の機会を与えないことによって犯罪を未然に防止しようとする立場」である (小宮2004, pp.299-301)。

小宮 (2004) は、G.L.ケリング、C.M.コールズ『割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか—』(2004 [1996]) の監訳者のあとがきで、「割れ窓理論と犯罪機会論」について簡潔にまとめている。そこでは犯罪が生じる機会を与えない要素として、場所に関しては「領域性」と「監視性」をあげている²⁴。「領域性」とは、犯罪者の力が及ばない範囲を明確にすることであり、ハード面の区画性 (区切られていること) とソフト面の縄張り意識 (侵入を許さないとすること) から成る。「監視性」とは、犯罪者の行動を把握できることであり、ハード面の無死角性 (見通しがきかない場所がないこと) とソフト面の当事者意識 (自分自身の問題としてとらえること) から成る。物理的・心理的なバリアによって領域性が高められた場所や、視線を遮る物がなく、監視の目が光っている場所では、犯行を躊躇・断念する可能性が高く、犯罪者を締め出し、犯行にブレーキをかけることになる。(小宮2004, pp.301-302)

23 Wilson, James Q. and Kelling, George L. (1982)

24 犯罪に強い要素として「標的」に関しては、「抵抗性」を挙げている。これは、犯罪者から加わる力を押し返そうとすることであり、ハード面の恒常性 (一定不変なこと) とソフト面の管理意識 (望ましい状態を維持しようと思うこと) から成る。たとえば、1つのドアに2つ以上のカギを取り付けたり、持ち物に名前を書くなど。(小宮2004, p.301)

「割れ窓理論」とは、領域性と監視性のソフト面、つまり縄張意識と当事者意識を重視する。窓ガラスが割れたまま放置されているような地域では、犯行者は、犯罪が見つからない、通報されない、制止されないと考え犯罪を実行しやすい。そこで、「割れ窓理論」の主張では、地域において人々が、犯罪者の侵入を許さず自分たちの問題として監視を強め心理的なバリアを築き、犯罪を締め出し秩序違反行為を放置しない環境づくりを主張する。(小宮2004, p.301)「割れ窓理論」はまた、「だれがどのように秩序違反行為に対応すべきかという問題については、警察が中心となって容赦なく対応することよりも、警察が地域住民や関係機関とパートナーシップを組み、問題解決手法を用いて対応することを重視する。」(小宮2005, p.108)²⁵

BRAの活動の事例としてとりあげた「ネイバーフッド・ワッチ」とは、まさに地域指向型警察活動と連携しながら、しかし、まずは住民が当事者として防犯に取り組み、近隣での異変も逃さずとらえて犯罪を防ぐ運動である。ここの縄張り意識や当事者意識は目には見えないものであるが、その成果と地域のバリアを顕在化させた活動が、「グラフィティ・プロジェクト」であるといえる。自分たちの地域において一切の落書きを認めないという意味を、全てのグラフィティを消し去るという行動によって示し、ブラッケンベリー・エリアをグラフィティがない地域にする。また、「街路樹プロジェクト」は、ブラッケンベリー・エリアに街路樹を増やし地域の緑化に貢献するだけでなく、街路樹の

25 「このような対応の仕方は、『地域指向型警察活動』(Community Policing)や『問題志向型警察活動』(Problem-Oriented Policing)などと呼ばれる」(小宮2005, pp.108-109)。この論文で触れた、「防犯近隣チーム」(Safer Neighbourhood Team)の取り組みもその1つである。小宮(2005, pp.132-137)によると、割れ窓理論が重視する秩序違反行為は、イギリスでは「犯罪および秩序違反法」(Crime and Disorder Act 1998)として、法律の名前に採用された。そこでは、秩序違反行為への対策として「反社会的行動命令」(Anti-Social Behaviour Order)が新設された。秩序違反行為の多くが地域社会という狭い範囲で起こる事を想定して、警察官がこれに現場で迅速かつ容易に対処できるように、「刑事司法及び警察法」(Criminal Justice and Police Act 2001)では、街頭で酔って暴れている人などに対して、違法切符 (penalty notice) を交付する権限を警察官に与えた。また、この違法切符の権限は、「警察改革法」(Police Reform Act 2002)によって創設された地域支援警察職員 (Community Support Officer) や、「反社会的行動法」(Anti-Social Behaviour Act 2003)によって地方自治体の近隣巡視員 (Neighbourhood Warden) などのうち警察が認定した者も、行使できるようになった。

1本1本がプロジェクトの関係者にとっては、自分たちの活動と地域との関わりを示す象徴となる。

個人の選択を基盤とした住民組織

小宮（2005）は著書において、「割れ窓理論の実践によって縄張り意識と当事者意識が高まった『場所』は、コミュニティと呼ばれるのにふさわしい。というのはコミュニティの基本的特性は『地域性』と『共同性』であるといわれているので、縄張り意識と当事者意識が低い『場所』は単なる地域にすぎないが、縄張り意識と当事者意識が高い『場所』はコミュニティの名に値するからである」と述べ「割れ窓理論によるコミュニティ再生」の可能性を探る（p.101）。

BRAの活動に関わる人々にとっては、諸プロジェクトの参加をとおして、最初は商業上、あるいは便宜上の名前であったブラッケンベリー・エリアが、心理的なバリアを備えた地域となり、場所への思い入れや住民としての自覚も育まれていく。しかし、BRAの活動は、小宮が想定する「コミュニティ再生」とは様相を異にする。このレジデンツ・アソシエーションは、特定の領域の問題にたいして結成された住民組織であり、地域の全体的な取り組みではない。BRAでは、とくに景観や環境の問題へは関心を寄せ、駐車場建設や大手スーパーマーケットの進出、地域内で自動車のスピード規制やパブの営業時間、文化財保存、落書きや街の緑化、などについては詳細な情報を集め議論する。しかし、社会福祉や労働問題については、これまでは主要なテーマとはなっていない。たとえば、独り暮らしの高齢者が抱える問題や、商業地の開発についても、生活環境への悪影響は懸念するが、雇用創出という側面から議論されることは少ない。

また、BRAが扱う問題にたいする住民からの関心も温度差があり、価値観も一様ではない。ある人は、通りに面した住宅の表側に衛星放送用アンテナが設置されたり、目につく不要物が置かれることには許しがたいと考える。ヴィクトリア時代の建物に不似合いな安っぽい窓枠や戸口がつけられたりすると、他人の家であっても非常に残念なことだと感じる²⁶。しかし、一部の住民としては、BRAの活動は、どうしてそこまでグラフィティ絶滅に執着し、街の景観維持に固執するのだろうか、と違和感を覚える。ネイバーフッド・ワッチの活動

にたいしても、犯罪防止を第一義として近所を見張るような地域づくりに疑問をもつ住民もいる。大切なのは、近所の人たちが顔を合わせ挨拶を交わす日常であり、人々が孤独にひきこもらず人と人が触れ合える地域の仕組みではないか、と。こうした批判の前提にあるのは、互いを認識し助け合う住民のあいだの対面的な関係である。だが、しかし、長年、地域に住んでいたとしても、そうした関係を築いているのは、ほんの一部の住民にすぎない。ましてや、最近、引越してきた居住者にとっては、近所の助け合いといっても、人と関わる接点さえ見出しにくい。

BRAが活動を始めたのは、こうしたばらばらの個人が住む地域である。BRAは、仮にブラッケンベリーと名づけた場所を設定しコミュニティという名義を借りて、地域をめぐる情報のネットワークを駆使し、BRAが提起する問題についての最新の詳細な情報を集め住民に提供し、住民からさらなる情報や意見や提案を求めた。そこから人々の関心を引き出し、課題を明確にした実践的なプロジェクトを企画し、住民を動員していった。

BRAが試みたのは、個人々が目的や関心に依じて地域と関わる緩やかな仕組みである。プロジェクトへ参加するのは、地域住民やBRAの会員としての義務感からではなく、その人にとってそれが興味深い、あるいは見逃すことができない問題だからである。そこでさまざまな関心や考えをもつ人々をつなぐ共通項が、ブラッケンベリーという場所でありコミュニティという漠然とした言葉である。しかし、最初は、ただの場所の名前であったものが、活動への参加と

26 2005年の取材のなかで、ある住民は、歴史的な町並みや住宅にたいする神経質なまでの愛着を、「イギリス人のミドルクラスの民族的オブセッション (national obsession) かもしれない」と表現した。それはミドルクラスの住民にとってはどうしても拭いきれないものであると話した。そこで住民が語ったのは次のようなエピソードである。「ある通りの住宅協会所有の賃貸住宅に外国人が入居した。彼らはすぐに建物の正面に衛星放送のアンテナを付け始めた。5分もたたないうちに、近所の住民たちが通りに出てきて、「そこにはアンテナをつけることはできません」と言った。これが新しい住民への最初の挨拶の言葉となった。その人は、近所の人々が何について抗議しているのか理解し難い様子だった。「ここは私が入居する家です。何が問題ですか。私はテレビを見たいのですが」。たぶん、彼らは、自分たちが引越してきたことが歓迎されなかったのだと感じただろう。だが、私たちが問題としたのは、『彼ら』についてではなく、その『アンテナ』についてだった。こうしたトラブルは、この地域ではよくあることだ。」

成果によって実在性を帯びてくる。住民組織の活動の場としての地域が創出され、ブラッケンベリー・ヴィレッジはときには一部の住民の暮らしと人生を豊かに演出するイベント会場となる。

だが、ここでの情報は、更新しなければ意味をもたず、実践をとまわなければ地域はただの名前となる。そういう意味では、BRAは、組織として強靱なものではなく、その時々構成メンバーによって活動の方向性も変化しうる。

地域コミュニティの可能性

個人の選択と自発性を基軸としたBRAという住民組織が、時には、特定の階層の利益を代表する団体だとみなされることがあるのはなぜだろうか。3つの要素が関連しているのではないかと考えられる。第1に、情報の共有と格差である。BRAの活動の基盤となっているのは、地域をめぐる豊かな情報網である。情報が住民をつなぎ、人々の関心を引き出し、行動へと動機づけていく。その過程で生ずる地域にたいする意識は、しかし、その情報のネットワークに連なる人々のあいだでの、あるいは活動を体験した人々にとってのリアリティである。BRAの活動が可視的であるほどに、情報を共有しない人々は蚊帳の外に置かれ、「彼ら」の取り組みは自己権益ばかりを追及すると映る。

第2に、BRAの課題解決、成果表出型の活動スタイルが外部に与える強い印象である。BRAは、情報を集め問題化するだけでなく、各課題の解決に向けて実践的に取り組み、目的、方法、成果を明確にしたプロジェクトを企画する。各プロジェクトは、数名が核となり数10名が参加する、実は少数精鋭の活動である。しかし、その行動は何らかの変化や成果を地域に残す。対外的にはBRAという看板をとおして印象づけられ、地域の多数を占める住民層による集団的な力の行使と警戒される。

第3にBRAへのステレオタイプ化された批評の背景には、次のようなコミュニティ観があるのではないか。つまりは、「コミュニティとは互助の精神に宿り、資産をもつ人々は自己の利益を優先しやすく、多くを所有しない人たちこそが助け合い支え合うコミュニティを築くことができる。」ミドルクラスとコミュニティは相容れないという考え方は、ミドルクラスだとみなされる、あるいは自称する人々の心のどこかにもある。

こうした3つの要素は、ブラッケンベリーと呼ばれる地域の住民や異なる住民組織のあいだの亀裂となるのだろうか。私は、情報網を充実させ課題と成果を明確にするBRAの活動スタイルは、異なる経済的階層や新旧住民のあいだの距離感を残しながらも、他の住民組織にも受け入れられ、今後は、多くの組織や団体の地域での連携がすすむと考える。調査地にはいくつもの住民組織があるが、多くは、それぞれの活動の収益と、行政や民間諸団体からの助成金を獲得して運営されている。外部から理解される成果がなければ資金を得ることはできない。評価主義や競争原理をいったん引き受けたうえで、組織の理念や方針に立ち返り、活動を組み立てざるをえない。そこでは情報から孤立した組織は生き残れない。他の住民組織との差異化をはかりながらも、異なる住民組織が連携しそのネットワークのなかに、さまざまな住民の活動の場としての地域が幾重にも重なり開かれたかたちで存在していくのではないだろうか。

私が、BRAの調査をとおして出会った人々の多くは、一代目のミドルクラスであり、築いてきた人生への自負心とともに、移ろいやすい社会への不安も抱いている。かつてあった（かもしれない）ストリートの住民が声をかけ合い関わり合う地域にどこか憧れ、BRAの活動の手応えや地域への愛着も感じるが、それは本来のコミュニティとは何か違うという感覚もある。現代の都市において自分が依拠する場所を必要としているのは、ときにはコミュニティとの親和性が薄いとみなされることもあるが、実は、ミドルクラスと呼ばれる人々ではないか。「ブラッケンベリー・ヴィレッジ」は不動産業者がつけた単なる名前ではなく、それを使う人々のあいだでは、都市のなかのヴィレッジやコミュニティに何かを求めたい本音も含まれている。コミュニティとは、実体がなくても、希求されるものとして、経済的階層にたいする意識を超えて、人々をつなぐ可能性のある言葉なのかもしれない。

この論文では、BRAという住民組織の運営とブラッケンベリーという場所における活動を中心にとりあげてきたが、地域内外の複数の住民組織や民間団体や学校、企業、そして行政や警察などとの、より広い地域における連携についても注目しながら、BRAをはじめとした住民組織の活動の今後の展開をみていきたい。

参考文献・資料一覧

書籍、論文

Gibbons, Steve

2004 “The Costs of Urban Property Crime” *The Economic Journal* 114 (November), pp.441-463

G. L. ケリング、C. M. コールズ著、小宮信夫監訳

2004 (1996) 『割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか—』文化書房博文社

小宮信夫

2004 「監訳者あとがき—割れ窓理論と犯罪機会論」 G.L.ケリング、C.M.コールズ 2004 (1996), pp.299-308

2005 『犯罪は「この場所」で起こる』光文社

London, Bruce and Palen, J. John

1984 “Some Theoretical and Practical Issues Regarding Inner-city Revitalization”, J.J. Palen & London, B. ed. *Gentrification, Displacement and Neighbourhood, Revitalization*, State University of New York Press, pp.4-26

London Borough of Hammersmith and Fulham

1993 *1991 Census, Census Report 2, Word Profiles for Hammersmith and Fulham*

2005 *2001CENSUS Report3 Indicators of Deprivation in Hammersmith and Fulham*

2006a *Borough Profile 2006*

2006b *Your Borough Your Future : community strategy updated 2005.*

西川麦子

2004 「ロンドン、ハマースミスにおける1970年代のコミュニティ開発の実験的試み」『甲南大学紀要文学編131社会科学特集』 pp.79-108

2006 “The Grove Neighbourhood Centre in Hammersmith, London: Successful Achievement of Forgotten Urban Community Development in the 1970s” 英訳：庄司早春、社会調査工房オンライン、5-3実験編—発信してつなぐ、所収

2007 「ロンドン、ノッティング・ヒルにおける1960年代初めのコミュニティ活動の試み—あるメソジスト教会牧師とニュー・レフト活動家の取り組み」『甲南大学紀要文学編146社会科学特集』 pp.39-67

2008a 「都市空間における地域コミュニティ形成の可能性についての文化人類学的研究—ロンドン、ハマースミスのNPOのコミュニティ・センター（GNC）の試み—」『都市空間における地域コミュニティ形成の可能性についての文化人類学的研究』（平成16年度～19年度科学研究補助金・基盤研究C研究成果報告書、代表西川麦子、課題番号16520514） pp.1-18

2008b 「フィールドワークの現場における『映像』利用の可能性—コミュニケーション・ツールとしてのビデオ・カメラ」『文化研究における映像と音（声）利用の可

能性—大学と社会をつなぐメディア実践』（平成18年度～19年度科学研究費補助金・基盤研究C研究成果報告書、代表者森田三郎、課題番号18520636）pp.37-52

園部雅久

2008 『都市計画と都市社会学』上智大学出版

Wilson, James Q. and Kelling, George L.

1982 “Broken Windows: The police and neighbourhood safety”, The Atlantic Online, March 1982.

資料

Brackenbury Residents Association

Annual General Meeting Minutes, 1999, 2001-2008

Newsletter: Summer 2003, January 2005, January 2006, July 2006, June 2007, Summer2008, Autumn2008,

Controller of Planning and Transportation, Policy and Researches Committee

Report (1973. 7. 17) “ London Deprived Areas-A Comprehensive Approach”

Hammersmith Broadway Safer Neighbourhood Team

Newsletter, April 2008- November / December 2008

その他

London Borough of Hammersmith & Fulham, <http://www.lbhf.gov.uk/>

Ward Profile-Hammersmith Broadway

http://www.lbhf.gov.uk/Images/Ward_profile_Hammersmith_Broadway_tcm_27-73241.pdf

Ward Profile-Rvanscourt Park

http://www.lbhf.gov.uk/Images/Ward_profile_Ravenscourt_Park_tcm_27-73241.pdf

Brackenbury Residents Association, <http://www.brackenbury.info/>

甲南大学社会調査工房オンラインVer.3 2006年4月28日最終更新

5 フィールドワーク（西川麦子担当）「5-2 事例編—ロンドン、都市の地域社会、コミュニティセンター」<http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/05frame.html>

Metropolitan Police Authority、Japanese translation of the MPA information leaflet,

<http://www.mpa.gov.uk/downloads/about/translation/japanese.pdf>

* いずれも2009年1月20日最終アクセス